





阿部知二

冬の宿

高見 順

激 流



河出書房

日本文学全集 35 阿部知二
高見順



© 1974

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和45年1月30日 初版発行
昭和49年7月15日 4版発行

著者	阿部知二
発行	高見順
印刷	和田彰三
装幀	原弘
印刷	刷・東洋印刷株式会社
製本	本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区
神田小川町三の六 株式会社 河出書房新社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯にあります

目次

阿部知二

冬の宿

高見順

激流（第一部）

年譜

文学入門

作家の横顔

荒正人 四二

青地 晨 四三

武田文章 四九

三三

三六

四

阿
部
知
二

冬
の
宿

第一章

……私の記憶はみな何かの季節の色に染まっている。それは、映画のフィルムの一齣ひとくちづつがいろいろな色を持っているようなものであるが、その記憶のフィルムの色はいつも正確な暦の上の季節と一致しているというわけではない。夏の日の出来ごとが秋の感覚を伴って想い出されることもあり、秋のことが晩春の甘い色に染まって想い出されることもある。また、ある年の冬ならば冬に、三日続いて起ったことの、はじめの日はほんとうに冬のように、次の日は春、その次の日は秋、のことでもあったように錯覚されることもある。これはその事件の性質や、その時の私の心の状態や、その事件に出てくる人物たちの性格容貌などによってそうなるのだと思っている。

……いま、数年まえに霧島家に寄寓きよぐしていたときのことを想い出すと、その秋から春にかけての出来事のすべてが、まったく初めからおわりまですこしの隙ひまもなく暗く冷却した冬の色に塗られてしまっているのだが、これは、あの一家の生活状態、私のそのころの気持、すべてが春や夏のような空気の一つも持っていなかったことのためであろう。そのころの私は地方の高等学校から出て

きて伯父の家に泊っていたが、学校にもあまり出ず、快活に友達とつきあうのでもなく、まったく人嫌いな心持になっていた。その時代の風潮として、身に近い友達が争って社会運動に入ってゆくを見送りながら、心細い気持で古い外国の文学をばかり読んでいた。華美な伯父の家の空気に反撥しながら、その従妹たちをとりまく娘たちのあれこれに恋愛してみたりやめてみたりしていた。そのなかで、庵原いばはらはま江という音楽の好きな少女が、しばらく心安かったがそれも夏の避暑地でほかの青年に出逢ってからは私を馬鹿にしはじめたし、友達のたれかれが官憲に逮捕されるというようなことがおこったりしたので、私は一層孤独な気持になってしまつて、どこかの下宿に一人で暮したくなった。学校にも友人にも伯父の家にもなるべくかけはなれたところに行きたいと思つた。

ほのぼのと明るく暖かい秋の暮のある日に、私は省線のK駅でいせに出任せに降りてそのあたりの家をさがしてみた。線路の内側の高台には大きな邸宅もりが杜もりにつつまれた段々になって連つていたから、私を泊めてくれるような家はないと思つた。反対の側に出てゆくと、郊外の街道の両側に小さな貧しそうな店がつづき、町裏の低地には汚れた小工場が立ちならんでいて、そこにも探すような家があるとも思えなかった。仕方なしに、次の駅まで歩

いてゆくことにしていると、しばらく泥溝の匂いの深い、暗い貧民街の家並がつづいていて、この低い家はどこまでもつづくようにみえ、自分はどこに行っているのかしばらくは見当もつかなかったが、まもなく低地のひろがりには次第に狭まり、小さな石鹼工場のところまでくると、細い径がその工場の裏で、白ちやけた雑草の生えた崖につきあたり、崖の上には樹々と屋根が一面にいま落日に真紅に染まっている小住宅街があるらしかった。汚れた着物をきて遊んでいる子供たちに怪しまれながら崖を伝ってその住宅街にのぼってゆくと、そこは凸凹の多い一帯の高台で、下の工場からの煙で黒くなった屋根が樹々にかこまれて不規則にならび、粗末な生垣のかけに小月給取などの住宅らしいものが肩をならべていた。その真ん中のあたりに来たと思うとき、昔の武蔵野の名残りとも思われる高い樺の樹立がそびえていて、いまは秋の落日のなかに、黄色に染まった空から黄金色の枯葉を雨のふるように落していた。そのかげに、屋根に落葉をためた小さな古びた二階家が一かたまりになって崖に寄りそい、そこだけはひどくしずかなおもむきがあった。

崖にひとかたまり白い花の群がみえたので近づいてみると、それは咲きほおけて色が褪せかけた野菊の花であったが、その時、私は一軒の家の格子戸に「かしま」と

細々とした女の手でかかれた半紙が半ばとれかけて風にひらめいているのをみた。中に入ってゆくと三十を少しすぎた、色の白い女が出てきて上品に挨拶した。彼女は、私の田舎の母が昔のころ着ていたような、渋く蒼い底光りをもった地味な絹物をきていたが、この蒼光りする着物につつまれた彼女の白い円い顔、観音眉、黒い切長の眼、埴輪のように切れ込んだ口、また、静脈が一浮びあがっているような白い手などの全体が、私には古い陶器の光沢、硬さ、色、冷やかさ、を思わせた。部屋をみせてほしいというと、どこかの地方訛ののこったなめらかな言葉で、顔を赤らめながら、すこし警戒するように、私の学校や今迄いたところや郷里を訊ねたのだったが、学校とはあまりにかけはなれたこんなところに部屋を探しにきたことだけは少し不思議に思ったらしいが、ただ静かな生活がしたいからだと言明すると、そのほかに警戒することも無いと思ったのだろう、古風な屏風のある玄関から、粗末な木材のきしむ狭い階段を二階に案内してくれた。

二階には六畳と四畳半の二つの室があった。南と西とに向いた六畳をかせようというのであった。窓からは真向いに葉が疎になった樺の樹立があり、その枝の間からは、西日に染まった一帯の傾斜地の家並が、向うの工場地、その向うの高台へとつづいていた。西日に射しこま

れて、ざらざらの壁面をみせている部屋の中で、私の目についたものも、この女の顔や着物に負けぬほど変ったところがあった。小さな床には、古びた俳句の軸があった。その草書は、私には「ずず虫の……」までしか判じられなかった。壁の正面には、燕尾服をきた男の半身像の写真がある。彼は角刈の巨漢であつて、濃い眉と、大きな吊り上った眼と、円く坐った鼻と、黒々とした髭の下大きな口を持った四角な顔とを真正面から此方に向けて睨みつけ、襟には菊の造花を挿し、腕を背にまわして反りかえっている。私は吹き出しそうになつたが、傍に立ちながら、私とその写真を見付けた表情を感じて、明るい光の中で頬を赤らめている女を見ると我慢して眼をそらした。すると一方の壁には、気持のいい素描の版画があつた。疎な林のかげの草地のうえに、向いあつてゆるやかに身を横たえている男と女との素描である。ちかづいてみると「マティス」という署名があつた。巨漢の写真は、この抒情的な絵を、西日に火照つた室の中で睨みつけているのだ。さらに眼をそらして、襖のあいだから隣の室をみると、この家の子供のものらしい机があり、小学校の教科書がのつていたが、その前には、濃厚な色刷りの、基督の絵が二枚ある。一つは、しろじろとした裸身に釘を打たれて血を真紅に流している図であり、一つは跪いて天に祈っている図である。

しばらくして私は細かい条件などきくこともなしに、いつのまにか、この室を借りる約束をしてしまつていて自分に気がついた。もう日は向うの岡に沈んでいて、室は暗くなり、マティスも巨漢もキリストも俳句も臍氣になり、冷たい陶器の肌のような女の顔ばかりが蒼白く光つていた。これはどういふことになるだろう、と思ひながら、前金を置くといふので家を出た。室でみたさまざまのもの、女、着物、すべて、好奇心を惹いたことはほんとうであつたが、私はそれをどういふ風に結びつけて、その家をどういふ風に考えていいかわからなかつた。

その家に移ることにきめたと伯父に話すと、彼はその家が学校からは今の倍も遠くなるということを言つて苦笑したが、もはや勧告しても何にもならぬと思つたのであろうし、また伯父の子供たちに自堕落な風習を感染させる私を、かねて遠ざけようと思つていたのであろうか、止めようともしなかつた。後からこの移転をきいた友達も、何かの魂胆があつてそうしたのであらうと推測するほどのこともなく、ただ、ぼんやりとした精神状態の男にありがちな気紛れだらうというように解釈したらし

移ることにした日の朝おきてみると、冷たい霖雨がし

きりに降っていたが、その雨は時には氷片をまじえた霰みぞれになったり、強い風を伴ったりして、とうとう三日間降りつづいてしまった。そのあいだに、あの家について感じた私の少しばかりの好奇心もさめてしまい、マティスもキリストも女も写真ももはや強い印象をあたえるのもなく、しだいに引越しが億劫おつうになって行つたのだつた。晴れた四日目に身を起して荷物をまとめたのは、ただ、約束をしたからそれを実行するという負担を感じていたからであつた。

荷車がついたと思うところに、坂路をその家に向つて登つてゆくと、泥濘ぬじりの深いその路からみた一郭の風景は、あのときと別のものではなかったか、と思うほど變つていた。まだ晴れ切らず、時々、雪を含んだ灰色の雲が低く垂れてきてあたりを蔽い、樺の樹立はこの一雨に黄金の葉をすっかり落してしまつて、骨張つた枯枝ばかりを空にひろげていた。濡れた屋根の群は黒ずんでうずくまっていた。崖路の菊は雨に腐つてしまつていた。私を迎えてくれた女の顔は一層白く蒼ざめ、あの西日の中で火照つていた陶器の光沢つやではなく、暗い冬の夕方にあたり空気よりもっと冷たくなって光を底に凍らせてしまつた陶器の感覚があり、その言葉も、凜れんとして刺すような響きがあつた。室には、子供の机も、燕尾服の写真も剥ぎとられ、ただマティスの絵だけが残つていた。魔術

のように變つてしまつた「冬の家」に私は入つてきたのである。マティスの絵をみたときそのことははっきり感じられた。四日前にみたときは、その絵の疎まばらな林は、その枝と幹の線条のあいだに何かやわらかに光る若芽がついていると感じられ、樹々の奥には小鳥の声がきこえ、流れか泉かのさざめきさえあり、男と女とは青々としげつてところどころに花の咲いた草上に、抱擁のあのかれにでも身をよこたえながら、涼しい眼で互を愛のある心をこめてながめあい、汗ばんだ肌を流れか泉かで水を浴びてあらおうとしてるようにみえたのだつた。實際彼等の足元に粗略に描かれた草の線は、萌え立つ緑色、マーガレットの白、罌粟けしの紅さえ心の眼に沁むほど感じられたものだ。あたかな風と、濃い空氣の匂いとが画面から流れてきていた。しかし、今は、林はただ裸木の骨組だけしかみえず、その疎な樹間からは冷たい風が吹き、地は凍こつて、枯草のうえの男と女とは、何か取りかえしもつかぬ過去をたがいに歎きあい恨みあつて、身をすくめて慄おそえをこらえているようにしかみえないのだ。

女は茶をすすめながら、私について簡単に身分や経歴をきいた。今度は私がこの霧島家のことをきく番であつたろうが、私は世馴れた風にこんな女にききただす仕方を知らなかつた。壁面に白い跡をのこして消え去つた燕

尾服の男は、この家の主人、門札に出ている霧島嘉門であるかどうか、一体この家は何をしてくらしているのか——そうしたことをちよつと訊ねてはみたかったが、結局、いそいできくことでもないと思つてやめた。女は、私の心を読んだのであろうか。平坦な口調でいった。

「あのおかしな写真が主人でございます。今日はもう直ぐ勤めからかえつてまいります。変り者ですからいろいろ失礼があるかわかりませんが、許して下さいますように。ほかに小学校三年の輝雄という男の子と、一年の咲子という女の子とございますが、上の方は悪戯で、下の方は泣いてばかり居ります。これも許して下さいまし。私たちは三年ほど前に、中国のあるところからこちらにまいりました。」

そういつて、女は降りて行こうとしたが、襖のところで立ちどまつて、「あなたは基督教ではございませんか。」とたずねた。

「いいえ。」

「それでは基督教はお嫌いではないでしょうか。」

「好きでも嫌いでもありません。」私は冷淡にこたえた。彼女は「私もクリスチャンです。」と、驚くほど強くきつぱりといつて降りて行つた。

ひとりて荷を解いているとき、子供たちが帰つてきた音がした、と思うと、賛美歌の音がきこえてきた。

きよき岸辺に やがてつきて

あまつみくにに ついにのぼらん

その中に男の子の甲高い声と、弱々しい女の子の声とがききわけられたが、一番高くひびき、何か狂熱を帯びているようにひびくのは母の声であつた。飛んだところに来たものだ、これよりは伯父の家の軽薄な陽気さの方がよかつたかも知れぬ、と思つているとき、母につられて、挨拶しに、子供たちが上つてきた。兄も妹も母に似て色が白く、兄は神経質な眼と、濃い眉をもち、妹は長い睫毛のあるかわい顔をしていたが、母の後から頭をさげると、恥ずかしそうに降りて行つた。降りかけに、兄は眉をびくびくとさせたと思うと、いきなり妹の髪の毛を引張つた。妹はひいひいと泣き出した。私は急いで従妹が饒別にくれた菓子子を妹にやつてその頭を撫でたが、その皮膚は泡にさわるようにやわらかく、融けてしまひそうに私の手には感じられた。私をおさるおさる見上げた茶色の眼からはとめどもなく涙が流れ出すのであつた。

階下からは夕餉の肉を煮る匂いが流れ、主婦の賛美歌と咲子の泣きぐえとが、それから、高く低くつづく夕方の方の街の物音と櫓の梢に鳴る風の音とに交つてきこえてきた。私は疲れて荷物の片付けも中途でやめて、蒲団の山のうえに仰向きに倒れて眼をとじ、その匂いをかき物

音をききながら、遠いところにひとりの旅にでもきたような気持ちになっていた。すると階段が今度はみしみしと大きく鳴りひびいたので、眼をひらいて振りむくと、暗い踊場のところに、まず、いが栗坊主の巨大な頭がみえ、支那人が『水滸伝』の豪傑あたりに臥蚕と形容した太い眉毛がみえ、それから、吊り上つてやや充血した眼玉、剃りあとの青い頬、大きな口、四角な顎があらわれて、びたりとこちらをみた。あの写真の主だな、と思ううちに、いかり肩、厚い胸部、ふくれた腹、大きな腰、大きな脚部が、浪底からあらわれる海坊主のように階段から浮かびあがり、その六尺に近い身体が敷居の前に直立したが、急に私の前に坐り、私が居すまいを直すひまもなく、耳に鳴りひびく声を発した。

「わたくしが霧島嘉門というものです。内閣調査局に勤務して居ります。」

私は手短かに自分のことを紹介した。

「わたくしは留守勝ちですから、よろしく願います。留守勝ちですから。」と念を入れるように私を見据えた。

その体は恐しいほどいかめしく、声は大きかったが、しばらくするうちに、それには何の邪気もない単純さがあるだけのこと、暴々しくみえる形相すらが、威張った子供の顔のように他愛ないものでないかと、思うほどの余裕が出来たので、私は持ってきた菓子すすめ、煙

草をすすめた。

「わたくしはクリスチャンですから、煙草はやりません。」今度のその声の大ききには、やや落ちつきを取戻しかけていた私もまた驚いてしまった。それは家中を震動させたのである。とみると、彼の手はそのときにもう一本の煙草を掴んで、喘ぐように低い声で「一本いただきます。」といった。

「実は家内にきこえるようにあいつたのです。」彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸いこむときに細めた眼の色、ぼっ！と吐き出したときに開いた眼の輝きをみていると、これはただの煙草でなく、世にも珍しい麻醉薬のようなものもあるようだった。

「わたくしの一家は落ちぶれてしまったものです。今はまったく窮地に陥って、他人に間貸しまですることになってしまいました。どうぞよろしく。」

私はここで大体この家のことは想像ができると思った。この主人、妻、子供たちの体質や容貌にも、どこかに特異なものがあり、部屋の調度や服装にも変ったところのあるもの、かつて彼等が地方の旧家ででもあったというところで説明はつくわけだ。どうして落魄したか、それがどうして基督教徒であるか、などということは分らないにしても、これは別に浪漫的な好奇心を湧かすことでも何でもない、といままでの私の好奇心を笑い、また

少しはがっかりしたのである。

嘉門は菓子をむさぼり、煙草の匂いを消すためだろうか、茶を何杯も飲んで口をがらがらと鳴らせたが、立ち上って私を銭湯に誘った。彼のあとからついて降りると男の子が私に口を曲げて「い、い、い。」という風をしてみせたが、それは私が彼の妹を可愛がりすぎたと思つて嘲弄したのだろう。嘉門は、「まつ子！ 風呂にゆくから飯を早くこしらえて待て！」と呶鳴りながら、汚れて古びた黄八丈の丹前ときかえ、肩をふりながら日暮れの街に私を従えて出た。夕飯前の銭湯は一杯の人だった。労働者よりは勤人が多いとみえて、みな私と似寄った蒼白く薄く細いからだの裸形が湯気の中に入りみだれていたのだが、その群の中に裸になって立った嘉門の堂々たる体軀はたちまちみなを威圧してしまつた。黒々と毛が生えた胸板、大きな腹、腰、腿、が、皆をかきわけ進むときに、他のものの体は影のようにしかみえなかつた。彼は改めて私のからだをみて、憐むような顔をしたが、一番熱い湯が出ているところに飛び込んで行つて、ざぶりと頭ごと漬つてしまい、しばらくして太い息を吐いて頭だけあらわし、太い頸のついた頭を、海豹のようにぶるぶると振つて水をとばし、それからまた驚くほどながい間湯につかっていたが、やがて水沫をあげて全身をあらわした。全身は真紅に輝いていた。私はただ感歎

して彼を見つめた。

夕飯にはみなで一緒についた。私は箸をとつて食おうとするとき、ふと皆がうなだれているのに気づいた。まつ子が静かな夕餉の祈りをしていたのである。嘉門は、「アーメン。」と大声でいって、もう肉切れに嚙りつき、それから幾杯となく飯をかえ、お菜が少いというのであった。輝雄は隣の妹を始終いじめている。嘉門は忙しく口を動かすひまひまにそれに気づくと、輝雄をしっかりとける。まつ子は、輝雄をかばつて嘉門をたしなめる。「何くそ！ 貴様の教育が悪い。」と嘉門が妻に食つてかかる。咲子はそのあいだにもうひいひいと泣いている。「お恥ずかしいことです。」とまつ子は眼を伏せていった。

「ははは、クリスチャンといつてもうちのはまだ充分ではないので、家内に引きずられているのです。」と嘉門はいった。

それから彼は、なかば愚痴のように、なかば自慢するように、彼の家の歴史を話してきかせたのだ。その歴史の立派な部分には、まつ子も眼で同意をするのだが、零落してゆく区切り区切り——それはいづれみな、嘉門の愚行のためであるが、その点を嘉門がごまかしてはなすときには、いかにも口惜しそうな顔をし、それから諦める色をうかべる。

……霧島家は、瀬戸内海に向つて北に山を負つた地方の旧家であつた。昔は、田地と、広大な塩田と、廻送船を持つていて、嘉門はその長男に生れて思うままの榮耀をしてくらしだ。彼の地方で最初に自転車にのつたのも、オートバイを買つたのも彼である。中学にも行けないほど我儘に育つて、もう少年のころから遊蕩の味を知つてしまつた。二十すぎの頃父をなくしてからはまったく思うままにくらした。紡績工場を造つて社長になつたがこれはすぐ飽きて、他人に渡してしまつた。人に媚てられて郡會議員になつた。

「ああ、あの二階にはつてあつた写真を御覧でしたか。あれは僕のその頃です。あれは、立憲民主党の犬田剛先生を迎えて演説会をしたとき、司会者をした記念です。」といひながら嘉門は立ち上つて腕を後にまわして胸を張つて、張り裂けるような大声で、「諸君！ 今回は這界の泰斗犬田先生を迎えまして……。」と、さげんでみせた。まつ子は顔をしかめていた。

……あまり馬鹿なことばかりするので、親戚の者に無理矢理にこのまつ子と結婚することをすすめられたのは、だいぶ歳をとつてからであるといつたが、年齢の相違から見るとまつ子は二度目の結婚の妻かも知れないが、そのことはその時言わなかつた。ただ近在の衰えた旧家から何も知らぬ娘を貰つてきたのだということは、

まつ子が今でもその親たちを恨み、自分の自覚が足りなかつたことを悔んでいると、後で私にはなしたことでわかる。私はある春に霧島家の郷土のあたりを旅行したことがあつた。花崗岩質の山はどこどころ白い肌をみせながら松の樹に蔽われ、樹蔭には赤と紫とのつつじが咲いていろのがみえていた。海は紫白色にのどかに日に輝き、山から海にかけては灰白い霞が一面にこめていた。山と海とのあいだには狭い平地があり、麦が伸び、菜種の花がさき、雲雀は霞の中に舞ひあがつて啼いていた。柑橘のみのつた丘のかげの入江にそそぐ川ふちには白い倉のある家が立ち、帆柱が家々の屋根のかげにみえる。松並樹を越えると広い塩田がつづき、その向うに海が光り、遠い島のかげが紫色にみえる。まつ子はこうしたところの白い道を、長い行列をつくつて霧島の家運に運ばれて、一夜にしてこの巨大な粗暴な男に身を任せてしまつたのであらう。そして、子供が生れるころには霧島家の財産はまったく崩れてしまつたのだ。

直接に没落の動機になつたのは放蕩でもなく、政治運動でもなく、彼の県の生糸の全部を、ある人におだてられて買占め、それが歐洲大戦後に遭遇したために暴落したことであつた。嘉門は財産整理をした親戚たちのために、いくらかの金をあてがわれて禁治産になつてしまつた。郷里で威張つていた彼は、恥を忍ぶ気にはなれない